月刊 第 598 号

春、守門から日本海まで

新生長岡市を表現する言葉として「守門から日本海まで」をよく耳にする。平場では已にほとんどの地域で田植えも終って全般的に言えば春本番と言ったところであるが、山間地をおそった今年の豪雪は平場でも雪捨て場にはまだ小山程の雪が残っており里山までは美しい緑に覆われているものの標高千メートル以上の山々は白衣をまとったままである。

先日妻の実家の法要で南魚沼市を訪れる機会がありお斎会場のホテルの屋上の露天風呂から眺めた八海山、中岳、駒ヶ岳、苗場山の山々が五月の快晴の空を背景に白く輝く光景は日本海を一望する寺泊の自慢の風呂と比肩に値するものであった。

五月はブルー系の花の季節と言えようか。勿論初春は白や黄色の花に始まり、やがて桜の季節を境に色とりどりの花が咲き乱れ今まさに花の盛りを迎えているのであるが、庭先の可憐なオダマキ、山裾を埋め尽くす程に花房を垂れている藤の花、庭や畠の一部に植樹された桐の花が毅然とした姿でまさに花盛りである。やがてアヤメ、ハナショウブの季節を迎える。五月晴れの空にはブルー系の花が似合うのである。五月の節句、鯉幟りに似合う花なのである。

雪解の水が滔々と溢れて今年は例年にない水量となり海に流れ出た水は海水温を低下させ南からの暖気とぶつかり合って思いがけない濃霧が海を覆う日が数日つづいた。

そんな異常な天候ではあったが例年の行事花まつりも白山さまの大祭も新イベントの寺泊観光まつりとよさこいフェスティバルも幸い快晴に恵まれた中で賑々しく挙行された。

県境の山々は純白に輝き平野は緑の里山に朴の花が大振りな花を開き米どころ新潟の田園地帯は早苗が五月の風に葉先をそよがせて広々と広がり「やまとはくにのまほろば」の一節に合致するふるさとまさに春です。

私とふるさとだより

大町　松田圭司

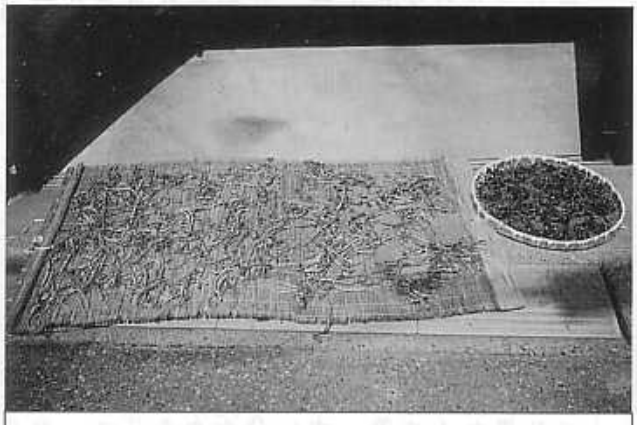
「ふるさとだより」は昭和三十一年頃寺泊出身者の求めに応じ発刊したのが始まりだそうです。

当時、私共町内の若者達にとっては、その頃でもあまり使われていなかった寺泊弁（ザイゴ弁）をやたら多用した田舎臭い聖徳寺さんの寺報程度の認識しかありませんでした。

その後折にふれ新潟寺泊会、東京、関西などの寺泊出身者からふるさとだよりを通して郷里

すっかり姿を消したタモギのある風景。岩室温泉近くの夏井集落はタモギの里としてこの風景を守っている。ここには談志（立川）の田甫がある。

これも最近は仲々お目にかかれない田植え風景。孫からおじいちゃん迄一家協力しての田植え。家までカメラを取りに走っての撮影であった。



春は山菜の季節である。ゼンマイは仲々手のかかる山菜である。フキノトウ、ゼンマイが春のはしりで、やがてキノメ、ワラビ、コゴメ、タラノメ、ウド等々。

への想いを耳にするにつけその役割りに共感するようになりました。友人の中村さんが昭和四十八年からふるさとだよりに共筆するようになってから、いよいよそれが身近かに感じられるようになり、ついに私が公務員退職後平成四年寺泊高校が「ゆきわり草」の研究で読売科学賞を授賞することになりその取材を中村さんから頼まれたのが当誌との最初のお付合でした。

又平成十四年からは写真を多くとの皆さんからの要望でその方面でお手伝いさせて頂くことになりその間平成十六年には四回に分け「少年時代のこと」で戦時中の私共子供達の生活について書かせて頂きました。

誌友の多くが鬼籍となられ又高令化が一段と進んだ昨今六百号を最後に閉刊することになりました。いささか若返った誌友からはまだまだ続けてほしいとの声もあるようですがここ寺泊も新生長岡市の一部になった事でもあり又新たな企画が生れてくることを期待しつつ幕を閉じることもいたし方ないかと思っております。

『ハーメルンの笛吹き男』

さとうのぶひと

いつか読もうと思って買い、結局読めなかった本がたくさんあります。いわゆる「ツンドク」。これの度が過ぎると、居住空間を圧迫するのみならず、重ね置きで背表紙が見えなくなり、探すのに一苦労します。そんな一冊に阿部謹也著『ハーメルンの笛吹き男』（平凡社、一九七四）がありました。寺泊のお祭りが近付くと、なぜかこの一冊を思い出すのです。長らく「ツンドク」だったこの本を、このお祭り前にやっと読み終えました。入手後、かれこれ二十年は経過したでしょうか。

なぜお祭りが近くなると、『ハーメルンの笛吹き男』の一冊を思い出すのでしょうか？　それはこれが「人さらい」のお話だからです。

お祭りには「よそ者」がたくさん出入りします。香具師が出店を張り、子供たち相手の商売をします。知らない人があふれ、知らない店が並び、知らない見せ物小屋が立ちます。子供たちは、見飽きた街並みが一変して非日常的世界が立ち現れたことに驚き、冒険心を刺激されます。子供たちにとってお祭りの魅力はそこにあるのです。

ところが親たちはそうもまいりません。お祭りは、親戚縁者、客人の接待に追われ、子供の相手などしていられません。そして「いいかい、決して一人で行くんじゃないよ。ああいうところは人さらいがいて、サーカスにでも売り飛ばそうと手ぐすね引いて待ってるんだからね」と子供を諭したのです。小学校ではお祭り前になると全校集会が開かれ、係の先生からお祭りに臨んだ心得や注意を受けたものでした。

この時の「人さらい」のメルヘンが『ハーメルンの笛吹き男』でした。学校の先生が話してくれたのか、絵本や童話で知り得たのか記憶が定かでありませんが、「知らない人に誘われたら、ついていってはいけない」という子供たちに対する警句になっています。

『ハーメルンの笛吹き男』のあらすじはこうです。一三世紀、中部ドイツ、ハーメルンの町に不思議な男が現れた。男はみずからネズミ捕り男だと称し、いくらかのお金を払えばこの町のネズミを退治してみせると約束

花まつりは四月の最終土曜日に挙行される。今年は片町照明寺から荒町聖徳寺まで30名余の稚児がおねりに参加した。みんなよい子に育ってほしい。

快晴のお祭り日和となった。今年はシモからの渡御。
天狗さまは高足駄で仲々の難行。
下荒町あたりで一度転倒とのうわさも。

こちらもお目出度い宴席。
野積岬温泉太古の湯のおひろめの鏡割り。
勢い余って酒の飛沫で露も濡るの一場面も。

した。取引が成立すると、男は笛を取り出して吹き鳴らした。間もなく町中のネズミが出てきて男の周りに群がった。男はネズミの群を川まで連れて行き、ネズミともども水の中に入ってすべてのネズミを溺死させた。市民たちはネズミの災難を免れると、報酬を約束したことを後悔し、口実を並べ立てて男に支払いを拒否した。男は怒って町を出ていった。しばらくして男は再びハーメルンの町に現れた。小路で笛を吹き鳴らすと、今度はネズミではなく四歳以上の少年、少女が大勢走り寄ってきた。子供たちの群は男のあとをついていき、山に着くとその男もろとも消え失せた。失踪した子供たちの数は一三〇人におよんだという。――グリム兄弟の『ドイツ伝説集』に採用され、あまりにも有名です。

もちろん阿部謹也の『ハーメルンの笛吹き男』はメルヘンではありません。ドイツ中世史の地味な研究論文です。一二八四年六月二六日、ドイツ中部のハーメルン市で起った、子供たち一三〇人の失踪事件。阿部はこの事件について今まで語り継がれてきたあらゆる研究を紹介し、伝説形成のプロセスを解明します。その中でみずからの歴史学の方法論を展開しています。そして、歴史資料は英雄や事件から読むのではなく、圧倒的多数派である庶民の視線で読むべきことを主張します。

そこに立つと、共同体から排除された被差別農民の不満、都市下層民のハーメルン市参事会（行政）への不満などが見えてきます。「笛吹き男」は同じように差別された遍歴芸人です。富者と支配者への復讐――この説話の本質はそういうことだったのです。

昔のことになりますが、ちょうどお祭りに近い暖かくなった頃です。「かんじん」と呼ばれる人物が寺泊によくやって来ました。髪は長く伸び乱れ、ひげはぼうぼうでボロをまとい、背中に汚れた風呂敷包みをしょっていました。子供の目に、異様な強い印象を与えました。疲れた足取りでゆっくり歩く「かんじん」に子供たちは群がり、面白がってついていきます。通りを行くほどプロセッション（行列）は長くなりました。

今になってみると、「かんじん」とは、歌舞伎で知られた「勧進帳」の「勧進」でした。何らかの事情で共同体を追われ、遍歴、放浪を余儀なくされた哀れむべき人物でした。それは、松本清張原作、野村芳太郎監督の映画『砂の器』の中で鮮やかに描かれています。

「かんじん」についていく子供たちの心理がよく理解できます。それは笛吹き男についていく、ハーメルンの子供たちの心理と同じものだったのです。

観光まつりとよさこいフェスティバルに合わせての海岸清掃に、県内外から応援団が参加。いい汗を流したあとのお祭りは佳境に。

中央海浜公園でのよさこい踊り。五月晴れと汐風の中で日頃の成果を存分に発散。いよいよ気合も入って応援団からの声援も飛び交う。

寺泊のイベントには名物番屋汁がつきもの。こちらも日頃の腕前を披露と商工会女性部の皆さん大はりきり。いい天気、いい笑顔。

誌代御後援（敬称略・順不同）

横浜市　仁木　良平　金五千円
〃　田口　稔　金五千円
千葉市　五十嵐甲子男　金五千円
柏市　浅野　宣子　金五千円
大和市　前田　昭　金三千円
新潟市　笹川三津子　金一万円
〃　古川原　豊　金五千円
〃　山谷　正清　金三千円
〃　青柳　成一　金五千円
長岡市　佐藤　良夫　金三千円
〃　石崎　啓資　金五千円
燕市　桂馬　誠治　金一万円
寺泊町　佐藤　仁一　金三千円
〃　柳下　浩三　金五千円
〃　小林　卓　金三千円
〃　石原　敏　金三千円
前橋市　三上　英雄　金一万円

小波会五月句会詠草

兼題　祭・卯の花他当季

祭り旗
五穀豊穣天靡く　広瀬　洋子

遠く住む
子も皆そろふ大祭　内藤　蓮子

寝る子も
供の一人よ浜祭　外山　海子

平伏して
豊作祈願春祭　竹内　霍山

女生徒の
笑いこぼるる花卯木　中村　流瓢

卯の花や
田に水満ちて風流る　江原　汀子

卯の花や
冷え冷えとして夜の道　能登　頑牛

端座して
卯の花匂う茶室かな　加勢　白汀

夕映えの
豪農屋敷花卯木　外山きよし

廃校の
丘は静かに花卯木　水沢　蕉子

里山の
萌ゆる若葉に気をもらふ　小島　冬扇

墓碑銘は
機関兵とあり踊草　大越碧水子

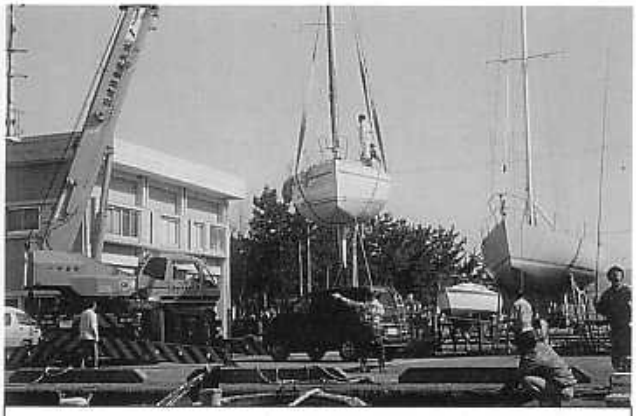
喪の家の
垣に炎え立つ金目鯛（かなめだい）　小島　温石

あとがき

雪解の水が猛烈な勢いで河口を流れ下って今盛りの鮎の稚魚の捕獲は全く駄目でこんな所にも豪雪の後遺症が現れています。日照不足で稲の生育への心配の声も出始めているようですが時に初夏を感じさせる陽気もあって愈々寺泊の季節へ向っての始動が町のあちこちから伝わって参ります。

先日終刊へ向っての準備の為の編集会議を開催、四七〇号から六〇〇号までの十年分の合冊本は紙装平背の上製本で一冊四千円程度で出版できる見通しが立ちましたのでその方向で計画を進めることにいたしました。又終刊の集いを九月十七日(日)ホテル住吉屋で午後三時から開催することにしました。ふるさとだより五十年をふり返りふるさとへの思いを語り合うなつかしく楽しい集いにしたいと思っております。会費は五千円位と思っております。十八日は敬老の日で連休となりますので県外の方々からもふるさと訪問の旅をかねてご参加頂ければと思っています。両方とも来月号で正式な案内と返信用ハガキを同封して一応予約をとらせて頂きたく思っております。又最終号への原稿の依頼などお願いの向きもあろうかと思いますのでこれ又よろしくお願い申上げます。どうぞ皆様のご意見ご感想などお待ちしております。

毎月二十日発行
寺泊ふるさとだより
誌代税共（百円）
編集人　中村　興樹
発行人
発行所　新潟県寺泊町　ふるさとだより
郵便番号　九四〇―二五〇二
ダイヤル局番　〇二五八七五
電話　二〇二九番
振替番号〇〇六二〇―三―五七四五
印刷所　吉野印刷株式会社



化粧直しも早々とすませて出番の来る日を待ち侘びていたヨット。大型グレンで吊り上げて貰って辛棒の陸から待望の海へ。

今春から就航の遊覧船ぽーとあいらんど号。
試乗会には保育園児も招待を受けた。
私も写真撮影に乗船、海からの眺めを楽しんだ。

観光関係業者のシーズンへ向っての準備も仲々大変で、この様な風景があちこちで見うけられる。
化粧直しでお客さんを待つ。　（野積地区にて）